

使徒の働き7章1－37節 「知恵と御霊の説教」

1A アブラハムに現れる栄光の神 1－8

2A ヨセフを拒む兄たち 9－16

3A 民が拒んだ預言者 17－37

1B ファラオの養子 17－22

2B 理解しない同胞 23－29

3B もうひとりの預言者 30－37

本文

使徒の働き7章を開いてください。ついに、話はエルサレムにおける教会の成長から、次に段階に入ります。それは、教会の中で、食卓に仕える七人を選んだところから始まります。ギリシア語を話すユダヤ人たちが選ばれましたが、その中でステパノ、そしてピリポが福音宣教で用いられることになります。ステパノは、これから殉教します。その殉教によって、エルサレムの教会に対する弾圧が始まって、それで人々が散り散りになるのです。それが、異邦人への宣教のきっかけとなるのです。そしてピリポは、サマリア人への宣教を始めていきます。

これまで十二使徒による福音宣教が前面に出てきましたが、主は同じ聖霊によって、これら執事とされた者たちをも通して同じ働きをされます。6章8節において、これまで十二使徒たちによって行われていた、不思議とするしをステパノも行っています。ここには、神の力とみことばの確かさが証されています。そこで、反応したのは、ステパノと同じく、ヘレニスト(ギリシア系)のユダヤ人たちです。リベルテンと呼ばれる会堂がエルサレムにありました。世界に離散したユダヤ人たちを代表する会堂です。その彼らが、強く反応しました。

以前話しましたが、迫害というのは、遠いところからではなく、近いところからの妬みによって引き起こされることが多い話をしました。ヘブル的なユダヤ人の間で集まっている時には、彼らは大きく反応していませんでした。今、ギリシア系のユダヤ人が使徒的な働きを行っていますから、ギリシア系のユダヤ人が強く反応しているのです。

けれども、ステパノの特徴は「知恵と御霊」です。「6:10 **しかし、彼が語る時の知恵と御霊に対抗することはできなかった。**」神のことばは、神の靈感によって書かれたものです。そして、その解き明かしも、御霊によります。そこにある知恵は、御霊からのものであり、御霊からの知恵は、世の知恵は反論できません。このことを、ステパノの弁明を見れば、自ずと分かります。彼らは反論ができないので、彼を偽証し、また中傷しました。そして今、ユダヤ人の最高法院、すなわち三ヘドロンが召集されたのです。使徒の働きの中で、最も長い説教がここに記されています。

ステパノへの非難は、彼らが強く信じているユダヤ教の根幹にかかわる内容です。「6:11 そこで、彼らはある人たちをそそのかして、「私たちは、彼がモーセと神を冒瀆することばを語るのを聞いた」と言わせた。」彼らにとって、モーセこそが神に建てられた預言者自身であり、彼のことばは、神のことばそのものです。モーセの教えに逆らうことは、神ご自身を冒瀆することになります。

そして、「6:14 『あのナザレ人イエスは、この聖なる所を壊し、モーセが私たちに伝えた慣習を変える』と彼が言うのを、私たちは聞きました。」と言っています。イエスがかつて、「この神殿を壊してみなさい。三日でよみがえらせる。」と言われた言葉を歪曲しています。そして、神殿ではなく、イエスの名によって集まるところには神がおられるという信仰ですから、神殿を冒瀆しているとみなされたのだと思います。ヘブル人への手紙には、イエスの告白をしていると迫害を受けていたユダヤ人が、こういった神殿礼拝の慣習の中に埋没しようとしているところに、警告をした内容になっています。イエスが、モーセよりも、神殿礼拝よりもすぐれているという内容です。

この第一の、モーセという預言者を冒瀆しているということに対して、ステパノは初めに語ります。今晚はこの部分、37 節までを見ていきたいと思います。そして、第二の、神殿を壊して、モーセの慣習を変えようとしているという部分は、38 節以降でずばり語っていきます。

1A アブラハムに現れる栄光の神 1-8

¹大祭司は、「そのとおりなのか」と尋ねた。²するとステパノは言った。「兄弟ならびに父である皆さん、聞いてください。私たちの父アブラハムがハランに住む以前、まだメソポタミアにいたとき、栄光の神が彼に現れ、³『あなたの土地、あなたの親族を離れて、わたしが示す地へ行きなさい』と言われました。

ステパノは、大祭司の質問に対して、はい、いいえで答えず、主を証しする機会としました。これは、主がまさに、地上におられる時に弟子たちに語られた約束です。「ルカ 21:12-15 しかし、これらのことすべてが起こる前に、人々はあなたがたに手をかけて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出します。¹³ それは、あなたがたにとって証しをする機会となります。¹⁴ ですから、どう弁明するかは、あらかじめ考えない、と心に決めておきなさい。¹⁵ あなたがたに反対するどんな人も、対抗したり反論したりできないことばと知恵を、わたしが与えるからです。」

そして、弁明について、ペテロが、迫害や圧迫を受けている兄弟たちに対して、励ましている箇所があります。「Ⅰ ペテ 3:15-16 むしろ、心の中でキリストを主とし、聖なる方としなさい。あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでも、いつでも弁明できる用意をしていなさい。¹⁶ ただし、柔和な心で、恐れつつ、健全な良心をもって弁明しなさい。そうすれば、キリストにあるあなたがたの善良な生き方をののしっている人たちが、あなたがたを悪く言ったことを恥じ

るでしょう。」脅えることなく、ただキリストを心の中で主とし、この方をあがめます。そうしていると、説明を求める人が出てくるので、恐れかしこみつつ、相手を敬いつつ、弁明するのです。それは、神を知らない人々に対しても、伝わるような言葉です。彼らの土俵でその希望を語ることです。

ステパノは、「兄弟ならびに父である皆さん」と呼びかけています。兄弟とは同胞のユダヤ人たちのこと、父は最高法院、サンヘドリンの議員たちのことです。彼らの土俵になって、彼らと同じ目線で語り始めました。

彼は、自分たちの父祖であるアブラハムから語り始めます。モーセもユダヤ人に敬われていますが、その先にいた人、アブラハムも敬われています。ステパノは、彼らのモーセから始まる教えに対して、その前にアブラハムに対する神のことばがあるだろうと言っているわけです。これは、後にパウロが、ローマ人への手紙やガラテヤ人への手紙で行ったように、ユダヤ教で大事にしている戒律で、割礼について、モーセの前にアブラハムによって行われ始めたことを論じています。その、もっと大きな視野の中で、モーセに律法が与えられたことを論じるのです。

アブラハムについて、エルサレムの聖所から遠く離れた、メソポタミア地方で、主なる神に栄光の神が現れたということです。彼らは、エルサレムにこそ神の栄光が現れ、神殿の中に住まわれると信じていました。しかし、元はと言えば、遠く離れた、異邦人の地において、割礼を受ける前にすでに、栄光の主が現れていたのです。モーセにも、燃える柴の中で現れ、それでモーセのことばに、神の権威があると信じていましたが、その前にアブラハムなのです。

⁴ そこで、アブラハムはカルデア人の地を出て、ハランに住みました。そして父の死後、神はそこから彼を、今あなたがたが住んでいるこの地に移されましたが、⁵ ここでは、足の踏み場となる土地さえも、相続財産として彼にお与えになりませんでした。しかし神は、まだ子がいなかった彼に対して、この地を彼とその後の子孫に所有地として与えることを約束されました。

主は、アブラハムに「親族を離れて」と命じられていましたが、父テラと共にハランに来ました。そのため、父が死んでからようやく、主の示される地、約束の地に行くことが出来ました。父を敬うことは大事ですが、アブラハム自身が主なる神の召しに応えなければいけないのです。ユダヤ人たちは先祖を敬っていましたが、それよりも大事なものは、主に語られていることに聞き従うことです。神のみことばをそのまま聞いて信じる、生きた信仰こそが大事です。

そして、彼はまだそこを自分の土地としていませんでした。彼らの信仰は、その地ではなく、天の故郷にあこがれていたのです。「ヘブ 11:13 これらの人たちはみな、信仰の人として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるか遠くにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり、寄留者であることを告白していました。」このアブラハムの信仰に倣うのです。

ところが、エルサレムにいることそのものが大事で、地上のエルサレムだけでなく、上からのエルサレムが地に下りてくるところに、望みがあることを聖書は教えています。彼らが背いた時に、エルサレムが破壊されたのは、そのことを物語っています。もしそこだけが望みなのであれば、神がバビロンにお許しになって、破壊せしめることはあり得ません。

⁶ また、神は次のように言われました。『彼の子孫は他国の地で寄留者となり、四百年の間、奴隷となって苦しめられる。』⁷ また、神は言われました。『彼らが奴隷として仕えるその国民を、わたしはさばく。それから彼らは出て来て、この場所でわたしに仕えるようになる。』

これは、主がアブラハムに語られた時、約束された土地の相続はどうなるのか？と主に尋ねた時に、語られたことです。エジプトの川からユーフラテスの川までを与えると主が語られる前に、このことを語っておられました。彼らは、エジプトの地で奴隷になって、そこから連れ出されて、神の契約の民となりました。

この、あまりにも明らかなユダヤ人の歴史を語るだけで、彼らの考えていることを崩す、強力な議論でした。ユダヤ人たちは、先祖たちを誇っていました。自分たちがアブラハムの子孫であることを誇り、ユダヤ人であればそのまま、神の国に入ると信じていました。異邦人は改宗してユダヤ教徒にならなければ、御国から外されていると思っていたのです。ユダヤ人、そして外の世界と考えていたのです。そうした誇りがありますから、先祖たちが異教の地に行った奴隷出身であったことは思わずに生きていたのです。

それが、分かるのは、ヨハネ 8 章におけるイエス様と彼らとの会話です。「8:32-33 あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」彼らはイエスに答えた。「私たちはアブラハムの子孫であって、今までだれの奴隷になったこともありません。どうして、『あなたがたは自由になる』と言われるのですか。」奴隷であったことを、忘れているのです。これはまさに、神の恵みを忘れてしまった、選ばれた民の姿です。キリスト者も、そのままでは罪の奴隷で、滅んでしまうだけの者だったということを忘れて、神の恵みを忘れ、自分たちの間に壁を設けていることはないでしょうか？こうでなければいけない、という見えない壁です。

⁸ そして、神はアブラハムに割礼の契約を与えられました。こうして、アブラハムはイサクを生み、八日目にその子に割礼を施しました。それからイサクはヤコブを、ヤコブは十二人の族長たちを生みました。

男子の性器の包皮を切ることが割礼ですが、神がアブラハムに契約のしるしとして与えられました。そしてイサク、ヤコブを経て、イスラエル十二部族の族長たちが現れます。ユダヤ人たちは、割礼によって神との契約の民になり、神の国を相続する、すなわち救われると信じていました。け

れども大事なものは、アブラハムがこれまで見てきた信仰の歩みをしてきたこと、神の声に信仰をもって応答してきたこと、御霊に導かれたこと、その信仰を受け継ぐ子孫として、割礼の契約を受けます。それはあくまでも、心にある包皮が切り取られて、神の御霊の声に敏感になり、聞き従うということを、目で見える形で表したのです。

ですから、モーセ自身がイスラエルの民に警告していました。申命記 10 章 16 節です、「**あなたがたは心の包皮に割礼を施しなさい。もう、うなじを固くする者であってはならない。**」ところが、その後のイスラエルの歴史が、心の割礼を受けていたのか定かではない。むしろ無割礼であったことが後の姿を見ると分かってきます。神殿礼拝はしっかりしているけれども、心を頑なにしていた民に対して、エレミヤが預言しました。「**4:4 ユダの人とエルサレムの住民よ。【主】のために割礼を受け、心の包皮を取り除け。そうでないと、あなたがたの悪い行いのゆえに、わたしの憤りが火のように出て燃え上がり、消す者もないだろう。**」

ステパノが、この説教の最後でこう語るのです。「**7:51 うなじを固くする、心と耳に割礼を受けていない人たち。**」ユダヤ人への命令のことで、それを守ることは大切ですが、いつの間にか、その生きた神との交わり、信仰による交わりから離れて、割礼を受けることだけに焦点があてられ、それで救いも決まるようにみなしていたのです。これは、水のバプテスマでも同じことが言えるでしょう。水の中に入るという行為が、救うではありません。事実、自分が古い人に死に、キリストと共に新しい命ある生活を送っているかどうか大事なのです。

2A ヨセフを拒む兄たち 9-16

⁹ 族長たちはヨセフをねたんで、彼をエジプトに売りとばしました。しかし、神は彼とともにおられ、

¹⁰ あらゆる苦難から彼を救い出し、エジプト王ファラオの前で恵みと知恵を与えられたので、ファラオは彼をエジプトと王の全家を治める高官に任じました。

ヨセフの話に入ります。ヤコブの十二の息子のうちの一人です。ここで、この族長たちが、神の救いに用いられたヨセフを妬んだということが大事です。これが、後に来られる方キリストへの妬みに重なります。ユダヤ人として来られたキリストは、同胞である宗教指導者たちから妬まれて、それで殺されました。

しかし、主がエジプトにおいて、共におられました。アブラハムにメソポタミア地方で栄光の神が現れてくださったように、イスラエルの地からはるかに外れたところで、共におられるのです。ですから、彼らが聖所だけに拘っているのを見透かしています。さらに、異邦人の王ファラオの前で恵みと知恵が与えられたことに言及しています。同じように、ローマの前でも、神は恵みと知恵を与えてくださるのです。イエスは、反ローマではありませんでした。そして、この方が世界に、主であると証しされ、またユダヤ人の王でもあります。ヨセフの姿は、後に来るキリストの姿を映し出して

いたのです。

¹¹ すると、エジプトとカナンの全地に飢饉が起こり、大きな苦難が襲って来たので、私たちの父祖たちは食べ物を手に入れることができなくなりました。¹² しかし、ヤコブはエジプトに穀物があると聞いて、まず私たちの父祖たちを遣わしました。

飢饉のときに父祖たちは穀物のためにエジプトに下りますが、異邦人の王によって助けられています。先祖たちが、彼らが誇るように、自立していたわけでもないのです。むしろ、神の恵みによって立っていました。

¹³ 二度目のとき、ヨセフは兄弟たちに自分のことを打ち明け、ヨセフの家族のことがファラオに明らかになりました。¹⁴ そこで、ヨセフは人を遣わして、自分の父ヤコブと七十五人の親族全員を呼び寄せました。

ヨセフは、ヤコブの家を救うことも用いられます。そして、自分たちの父祖たちはそのことに気づくのは、二度目に彼に会う時なのです。この「二度目」が大事です。彼らは、初めにヨセフを拒んだように、キリストとされたイエス様を拒みました。けれども、二度目に現れる時には彼らは認めます。

イエスが、神殿の敷地において彼らに対して、「禍だ」と八度、宣言されました。そして、彼らの家は荒れ果てたまま見捨てられることになる宣言し、しかし、こう言われました。「マタ 23:39 わたしはおまえたちに言う。今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまえたちが言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」彼らが悔い改めて、この方にメシアを称賛する言葉、詩篇 118 篇 26 節にある「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」という時が来るということです。ゼカリヤ書 12 章に、こうあります。「12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。」一度目は、兄弟たちから拒まれるが、二度目に受け入れられるということは、ヨセフの時もキリストご自身の時もそうなのです。

ところで、創世記ではエジプトに下ってきたヤコブの家族は 70 人となっていますが、ここでステパノは 75 人と言っています。これは矛盾しません、ヨセフの子は 5 人います。ステパノは、ヨセフの子はエジプトの子ではなく、ヤコブの家の者たちなのだとすることを強調しているにすぎません。

¹⁵ こうして、ヤコブはエジプトに下り、そこで彼も私たちの父祖たちも死にました。¹⁶ 彼らはシェケムに運ばれ、かつてアブラハムがいくらかの銀でシェケムのハモルの子らから買っておいだ墓に、葬られました。

こちら、創世記の記述と表面的には違います。シェケムで買ったのはヤコブであり、葬られたのはヨセフだからです。ヤコブは、アブラハムがヘブロンで購入した畑地でサラのために墓を作ったのですが、アブラハム、イサクに並んで自分もそこで葬られました。けれども、ここの「彼ら」というのは、ヨセフと他の十一人の息子たちのことで、彼らもまたシェケムに運ばれて、そこで葬られたのでしょう。それから、アブラハムが買ったとありますが、それはヤコブが買ったけれども、父祖アブラハムを代表して買ったと言えます。

ところで、ここシェケムは、新約時代はあのサマリアの女の舞台、スカルのすぐそばの町です。サマリア人たちが住んでいます。ユダヤ人に対する誇りから、サマリア人を嫌っていたのですが、けれどもそこに自分たちの父祖の墓があるのです。そして、ピリポの宣べ伝える福音によって、サマリア人たちも、ユダヤ人のメシアを知るに至ります。

3A 民が拒んだ預言者 17-37

1B ファラオの養子 17-22

¹⁷ さて、神がアブラハムになされた約束の時が近づくにしたがい、民はエジプトで大いに数が増え、
¹⁸ ヨセフのことを知らない別の王がエジプトに起こる時まで続きました。¹⁹ この王は、私たちの同胞
に対して策略をめぐらし、私たちの先祖たちを苦しめて幼子を捨てさせ、生かしておけないように
しました。

「約束の時」というのは、アブラハムに対して神が言われた、エジプトを出ていく時のことです（6-7節）。神は、民がエジプトへの愛着を自ら切るために、そして約束の地に向かわせるために、ヨセフを知らない王が立つのを許されたともいえるでしょう。

²⁰ モーセが生まれたのは、このような時でした。彼は神の目にかなった、かわいい子で、三か月の間、父の家で育てられましたが、²¹ ついに捨てられたのをファラオの娘が拾い上げ、自分の子として育てました。

ここで彼らが拘っているモーセ自身が現れました。ユダヤ人は、モーセの律法に関わる慣習に違反しているとステパノを責めていました。しかし、そのモーセをしても、神は、迫害しているファラオの娘をかえって、用いられているのです。ですから、彼らが反感を抱いているローマにさえ、神の贖いの計画の一部となっているとも言えるのです。

²² モーセは、エジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにも行いにも力がありました。

興味深いことに、神の前では口下手と言っていました。「出 4:10 モーセは【主】に言った。「ああ、わが主よ、私はことばの人ではありません。以前からそうでしたし、あなたがしもべに語られてから

もそうです。私は口が重く、舌が重いのです。」それは 40 歳の時に、自分ができると思っていたの、イスラエルを救って、自分に与えられていた宮廷における力を使って、彼らを出させるということについて、その能力が何の役にも立たなかったからでしょう。自身の喪失感から、そう言ったと思われる。

2B 理解しない同胞 23－29

²³ モーセが四十歳になったとき、自分の同胞であるイスラエルの子らを顧みる思いが、その心に起こりました。

彼は、幼い時に母から離れ、エジプトの宮廷におり、エジプトの学問を受けていましたが、それでも、同胞を顧みる心が起こされていました。これについて、ヘブル書 11 章で解説があります。「11:24-26 信仰によって、モーセは成人したときに、ファラオの娘の息子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみにふけるよりも、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受ける辱めを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えました。それは、与えられる報いから目を離さなかったからでした。」彼の神の民を顧みる思いは、キリストご自身がユダヤ人を顧みる思いにつながっています。

²⁴ そして、同胞の一人が虐待されているのを見て、その人をかばい、エジプト人を打ち殺して、ひどい目にあっていて人のために仕返しをしました。²⁵ モーセは、自分の手によって神が同胞に救いを与えようとしておられることを、皆が理解してくれるものと思っていましたが、彼らは理解しませんでした。²⁶ 翌日、モーセは同胞たちが争っているところに現れ、和解させようとして言いました。『あなたがたは兄弟だ。どうして互いに傷つけ合うのか。』²⁷ すると、隣人を傷つけていた者が、モーセを押しつけながら言いました。『だれがおまえを、指導者やさばき人として私たちの上に任命したのか。』²⁸ 昨日エジプト人を殺したように、私も殺すつもりか。』²⁹ このことばを聞いたモーセは逃げて、ミディアンの地で寄留者となり、そこで男の子を二人もうけました。

ここが大事です。「自分の手によって神が同胞に救いを与えようとしておられることを、皆が理解してくれるものと思っていましたが、彼らは理解しませんでした」というところです。ヨセフの時と同じです。イスラエルの家を救う者として選ばれていたのに、イスラエル人たちが理解せず、退けたのです。父祖は、ヤコブの家を救う人を妬み退け、また、モーセが救う人であったのに、それを退けたのはイスラエル人なのです。

さらに、その結果として、ミディアンの地、異邦人の地に行きました。それと同じように、イエスはユダヤ人に拒まれたので、救いがかえって異邦人の間に広がりました。ここにも、ヨセフと同じものがあり、ヨセフは異邦人の国エジプトで総理大臣になりました。

3B もうひとりの預言者 30-37

³⁰ 四十年たったとき、シナイ山の荒野において、柴の茂みの燃える炎の中で、御使いがモーセに現れました。³¹ その光景を見たモーセは驚き、それをよく見ようとして近寄ったところ、主の御声が聞こえました。³²『わたしは、あなたの父祖たちの神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である。』モーセは震え上がり、あえて見ようとはしませんでした。³³ すると、主は彼にこう言われました。『あなたの履き物を脱げ。あなたの立っている場所は聖なる地である。³⁴ わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみを確かに見た。また彼らのうめきを聞いた。だから、彼らを救い出すために下って来たのだ。今、行け。わたしは、あなたをエジプトに遣わす。』

ここでステパノは、「シナイの荒野が、そのまま聖なる地になっている」ということを言い表しています。エルサレムのヘロデの再建した神殿ではなく、遠く離れたシナイの荒野にある山で、そこがそのまま、アブラハム、イサク、ヤコブの神の現れるところ、聖なる地となったのです。

³⁵『だれがおまえを、指導者やさばき人として任命したのか』と言って人々が拒んだこのモーセを、神は、柴の茂みの中で彼に現れた御使いの手によって、指導者また解放者として遣わされたのです。³⁶ この人が人々を導き出し、エジプトの地で、紅海で、また四十年の間荒野で、不思議としるしを行いました。

ステパノがここまで長々と、アブラハムから語っている理由が、ここに表れています。モーセの前にアブラハムだ。そして先祖たちは、ヨセフを拒み、二度目に受け入れた。そして、あなたがたが敬っているモーセもヨセフと同じなのだ。先祖たちが拒んだモーセを、主は解放者として定めておられたのだ。モーセが再びイスラエル人の前に現れたら、その時に彼が預言者であることを認めたと、同じように、ユダヤ人の宗教指導者たちが拒んだイエスが、再び彼らの前に現れたら、イスラエルはこの方が来るべきメシアであることを認めるのだということです。

³⁷ このモーセが、イスラエルの子らにこう言ったのです。『神は、あなたがたの同胞の中から、私のような一人の預言者をあなたがたのために起こされる。』

これが、申命記に書かれている、モーセが告げた言葉です。ユダヤ人には、いろいろな預言者が現れましたが、モーセのような預言者が現れる。彼に聞かないといけないと語りました。その方イエスなのだとすることをステパノは伝えています。ペテロも、前の説教で伝えていました(3:22-26)

いかがでしょうか？ 彼らは、モーセと神を冒瀆していると訴えていましたが、ものの見事に、モーセどころかアブラハムから始まり、そこで栄光の神が現れ、モーセがあなたがたの父祖によって拒まれたのだよ、と訴えているのです。そして割礼も、肉の包皮の前に、心の包皮を取り除けと、モーセ自身が語っていたでしょ？ ということです。彼らの告発は、むしろ彼ら自身に帰ってきています。

モーセと神に反抗しているのは、むしろ訴えている彼ら自身なのです。

これが、知恵と御霊によって語るということです。真新しいことを語っていません。むしろ、古いまま、そのまま語っているのです。そして彼らが古くからのしきたりと思っているものが、実は後で付け加えられたもので、人の教えであり、神のことばを空しくしていました。私たちも、教会の中で、いつのまにか、キリストの教えを初めから、その恵みから離れて、自分たちを守るための枠組みを作っていやしないでしょうか？それで、自分の立っている拠り所が、福音の真理ではなく、取って替るものになっていないでしょうか？私たちにも、知恵と御霊が必要です。